

インフォメーション

問い合わせ：仙台市市民活動サポートセンター
TEL 022-212-3010 / FAX 022-268-4042 Mail sendai@sapo-sen.jp

19期事務用ブースの使用団体追加募集!

使用期間:平成30年6月1日~平成30年8月31日
※9月以降の使用については第20期の募集要項が決まり次第お知らせします。
(最長3年まで使用可能ですが、継続にあたり毎年審査があります)
対象:継続的に市民公益活動を行い、市内に専任事務所をもたない団体(企業を除く)
募集数:3ブース
設備等:机、椅子、ロッカー、面積約4㎡
使用料:月額7,100円
申込み受付期間:平成30年2月26日(月)~3月26日(月)まで ※ただし土日、祝日は除く
応募方法:仙台市市民協働推進課と市民活動サポートセンターにて配布の申込書にご記入の上、市民協働推進課へご持参下さい。(郵送不可)(仙台市ホームページからもダウンロードできます。http://www.city.sendai.jp/)
申込み/問い合わせ:仙台市市民協働推進課
仙台市青葉区二日町1-2-3アーバンネット勾当台ビル2階
TEL 022-214-8002



サポセンスタッフから

サポセンリニューアルしました

アンケートにご協力をお願いします

1月から2月にかけて、サポートセンターはリニューアル工事をを行いました。工事期間中はご迷惑をおかけいたしました。おかげさまで「なんだか明るくなったんじゃない?」「新しい樹の香りがほのかに感じられていいね」とのお声をいただいております。例年通り、利用者アンケート及び団体アンケートを2/19(月)~3/31(土)まで実施いたします。リニューアルの感想などもぜひお寄せください。



つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは

様々な分野の市民活動、ボランティア活動の支援施設です。「自分たちのまちをもっと良くしたい」。そんな市民の自発的な活動を応援します。

ご相談ください

ボランティア活動をしたい/団体を立ち上げたい/組織運営の悩みを解決したい/他の団体や他のセクターと連携したい/自分のスキルを地域や社会に役立てたい...

今月の休館日 3月14日(水)、28日(水)

開館時間 月曜日~土曜日 9:00-22:00
日曜日・祝日 9:00-18:00
休館日 毎月第2・第4水曜日(祝日の場合は翌日木曜日)年末年始

〒980-0811 仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010 FAX 022-268-4042
地下鉄南北線「広瀬通駅」西5番出口すぐ/地下鉄東西線「青葉通一番町駅」北1番出口から徒歩6分
[HP]http://www.sapo-sen.jp [Blog]http://blog.canpan.info/fukkou/ [Twitter]@sensapo

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行っています。[指定管理期間2015年4月1日~2020年3月31日]

市民ライターや学生記者が、仙台の市民活動団体やワクワクビトを取材しています!

▶市民ライター
http://blog.canpan.info/fukkou/category_23/1
▶情報ボランティア@仙台
https://ja-jp.facebook.com/jyoho.volunteer.sendai

▶「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。
▶ぱれっとに関するご意見をお寄せください。

[ぱれっと読者アンケート]サポセンホームページからアクセス
いただくか、携帯電話等で2次元バーコードを読み取ってご利用ください。



発行 仙台市市民活動サポートセンター
発行日 2018年3月1日
編集 特定非営利活動法人せんだいみやぎNPOセンター
デザイン PEACE Inc.
編集人 太田貴 菅野祥子 松村翔子 宮崎真央 小野真璃子
発行部数 3000部
配布場所 市内公共施設や行政窓口、市内一部店舗、市内外の支援施設

ぱれっと 3

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと 2018 No.223

「ぱれっと」には、仙台市市民活動サポートセンター(サポセン)にいろいろな人が集まり、それぞれの色(個性)が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

今月の
ワクワク
ビト
震災遺構 仙台市立荒浜小学校スタッフ
たかやま ともゆき
高山 智行 さん (35)

「暮らしがあった」
震災の教訓とともに伝えたい

荒浜地区出身の高山さんは、東日本大震災の震災遺構、仙台市立荒浜小学校の運営、管理をしています。荒浜小は2017年4月に一般公開され、2018年1月までに約6万人が訪れました。小学校を残し、震災発生時の状況を通して防災と減災を伝えます。

地震発生時、高山さんは荒浜で被災。「何かできることを」とSNSで行方不明者の安否情報の発信や持ち主不明の写真洗浄作業をしました。震災から1年後には、荒浜を訪れた人に声を掛け、亡くなった人たちの哀悼のため、花の種をつけた風船を空に飛ばすプロジェクトを友人らと共に実施。参加者が風船に故人を重ね、手を振る姿に、地元の人には故郷に思いをはせる場が必要と感じました。

「荒浜に暮らしがあったことを感じてほしい」と高山さん。校舎を訪れた人を、荒浜小の元教員から提供された写真とメッセージの展示と共に、自身の体験や地元住民の証言を交えながら案内します。荒浜に暮らしていた人が校舎を訪れた時、震災前の荒浜を思い出せるよう、荒浜小に復興の思いを託します。

取材・文 市民ライター 生沼 末樹

特集

大学と地域が手を取りあい

多世代が交流する桜ヶ丘へ

震災遺構 仙台市立荒浜小学校

TEL 022-355-8517

震災当日、津波が4階建て校舎の2階まで押し寄せ、児童や教職員、住民ら320人が避難しました。2016年3月に、七郷小学校と統合が決まり閉校。現在は、大きく損傷した校舎を耐震補強し、避難所として使われた時の黒板に記された名簿をコーティングするなどして、震災当時の状況を保存しています。消防ヘリが撮影した津波の映像や、新たに持ち寄られた写真を教室内で公開し、震災の教訓を伝えています。

大学と地域が手を取りあい 多世代が交流する桜ヶ丘へ

青葉区桜ヶ丘は文教地区と呼ばれ、宮城学院女子大学をはじめとした、多くの学生が住んでいます。一方で、町内には高齢化などの地域課題も存在しています。桜ヶ丘地区で大学と町内会が連携して始めた取り組みは、地域特性を生かしながら、様々な広がりを見せています。

桜ヶ丘学区連合町内会

文教地区にふさわしい、
住んでみたいと思えるまちを
次世代に残したい



会長
さかい ふみお
酒井 典雄 さん

宮城学院女子大学社会連携センター

大学の資源を生かして
地域をサポートし、地域とともに
学生を育てていきたい



主幹
かめ やじゅん
亀谷 純 さん

×

→

学生が活躍する地域、桜ヶ丘

桜ヶ丘地区は、保育児から大学生まで、約5,600人が学び育つ文教地区です。桜ヶ丘にキャンパスをかまえる宮城学院女子大学の学生も、学生寮やアパートに500人以上が住んでいます。学生たちは、桜ヶ丘学区連合町内会(以下、町内会)の地域行事に自発的に参加し、企画から関わっています。「桜ヶ丘 杜の音楽祭」や料理教室は、子どもからお年寄りまで多くの住民が参加する地域行事で、桜ヶ丘キャンパスを拠点に開催されています。学生は「夏祭り・花火大会」のポスターやパンフレットを作ったり、「桜ヶ丘 杜の音楽祭」の進行を担ったり、地域で様々な経験を積んでいます。「寮と大学を往復するだけの生活では経験できない。町内の方と関わることができて良かった」「イベントの実施にあたっては、もっと町内会の方々とコミュニケーションをとり、一緒に作り上げていきたい」と学生たちはやりがいを感じています。

大学と町内が学生を支える

桜ヶ丘地区は1960年代半ばから開発された地域で、住民基本台帳(2016年10月1日現在)によると少子高齢化率は約33%と、仙台市

内でもかなり高い地域です。多くの学生が住んでいる一方、高齢化の進行や世代間の交流が減少している課題もあります。町内会会長の酒井典雄さんは、文教地区にふさわしい魅力があり、住みたくなるまちづくりに地域全体で取り組んでいます。

2014年4月、宮城学院女子大学内に設置された社会連携センター(旧、地域連携センター)は、企業や行政、地域と幅広いつながりをつくり社会に貢献することを目指しています。主幹の亀谷純さんは「通学のために桜ヶ丘に移り住んだ学生たちに、他所では得られない経験と充実感を味わってほしい」と考えていました。そこで、宮城学院女子大学から町内会へ、学生を介して子どもから高齢者までの世代間交流を図る取り組みを提案。学生を積極的に地域に関わらせたい大学の方針と、安心安全で魅力あるまちづくりを模索していた町内会の思いが重なり、協働で創るまちづくりプロジェクトが始まりました。これまで形式的だった町内会との関係をより密接にし、地域ニーズに応える活動に取り組んでいます。地域行事への参加にとどまらず、ゼミ活動として桜ヶ丘フィールドワークを実施。最後は地域住民を前に発表を行い、まちづくりプランの提案を行いました。学生の自発的な企画や行動を、大学だけでなく町内会も見守り支えています。町内すみずみまで行き渡る広報は、町内会が



桜ヶ丘学区連合町内会 TEL 022-279-7636 Mail rsg25820@nifty.com (酒井)
宮城女子学院大学 〒981-8557 宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘 9-1-1
TEL 022-279-1311 (代表) HP <http://www.mgu.ac.jp/>

力を発揮します。

「若い人の意見や提案の一つひとつが、まちづくりの参考になり、大いに役立っています」と酒井さんは学生たちの取り組みを讃えます。「町内の人とふれあい、行事の企画から関わることで、学生がイキイキと活動している」と亀谷さんは学生の変化を感じています。

連携が地域に浸透

町内会と大学が連携してまちづくりに取り組む姿を見て、他の機関もともにまちづくりに関わるようになりました。町内会が「顔の見えるお付き合い」をモットーに取り組む「あいさつ運動」もその一つです。地域の学校の協力で小学生・中学生の子どもたちも町内会にまぎって桜ヶ丘の中心街に立ち、月1回元気に声がけを行っています。住民同士があいさつを交わし、子どもたちを見守ると同時に、1人暮らしの高齢者が抱える孤独感の解消にもつなげています。「地域住民が地域活動の趣旨を理解し、何かにかかわることで町内は活性化します」と酒井さん。亀谷さんは、「今後も地域の活動が発展するよう、大学と地域のつながりの根をしっかりとしたものにしていきたい」と長期的にプロジェクトを続けていくことを目指します。(取材・文 嶋村威臣)

若い人から若い人へ 学生が伝える震災の教訓

市民ライター 阿部哲也

Team Bousaisiは、仙台市内を中心に防災減災活動に取り組む東北福祉大学の学生団体です。メンバーは約50人。ほぼ全員が防災士の資格を取得しています。町内会や小中学校からの依頼で防災の専門家として防災訓練に参加したり、市民センターで子ども向けの防災講座を行っています。毎週木曜日には、NHKのラジオ番組に出演するなど、メディアを通じた活動も行っています。



▲地図を使って地域に起きそうな災害を想像する訓練を行う学生たち。

Team Bousaisiが発足したのは、東日本大震災後の2013年5月。学生の持つ若い世代への発信力を生かして、震災から学んだ教訓を次世代を担う若者に伝えていくため活動を始めました。

Team Bousaisi代表の吉成仁紀さんは「日々生活している身の回りにも災害時には危険な場所がある」と語ります。平時から「いま大きな地震が来たらどのように身を守るか」と意識することで、実際に災害が発生した時にもすばやく行動することができるようになります。「若い人が若い世代へ震災や備えの必要性を伝えていきたい」と吉成さんは意気込みます。災害時には自分が助かった時にはじめて誰かを助けることができます。個人が防災意識をもって毎日を過ごすことが地域の防災力を高める第一歩なのかもしれないと感じました。

連絡先
Team Bousaisi(チーム防災士)
TEL 022-301-1183
Mail bousaishi@tfu-mail.tfu.ac.jp

お役立ち本
アートプロジェクトのつくりかた
監修:森司 編著:坂本有理、佐藤孝青、大内伸輔、声部玲奈
発行:フィルムアート社

芸術によって地域活性化を図る「アートプロジェクト」のつくりかたを例に、組織運営、資金繰りなどプロジェクトの進め方がまとめられています。「こんなときどうすればいいのか」をすぐに探し、確認することができます。これからプロジェクトを始めようと思った方が、まず必要な事は何かを知る参考書としてオススメです。



お役立ち本
県内の支援活動を応援!
「みやぎチャレンジプロジェクト」

社会福祉法人宮城県共同募金会では、県内で社会課題解決のために活動している団体と共に寄付の呼びかけを行っています。たくさんの方の中から自由を選んで、寄付ができます。気軽に社会貢献活動を応援してみませんか?寄付はwebから。

実施期間:3月31日まで

問い合わせ 社会福祉法人宮城県共同募金会

TEL 022-292-5001

HP <http://akaihane-miyagi.or.jp/challenge>



ここチェック
まちづくりのヒント発見
～地域情報紙『おらほ!のまちづくり』～

地域活動に取り組むきっかけや、活動を進める参考にしてもらおうと、仙台で行われている多彩な地域活動の事例を掘り起こし、その知恵と工夫を紹介しています。また、まちづくりの参考になる本や冊子、仙台市が実施するまちづくり支援策を紹介するミニコーナーも参考になります。市民局地域政策課、各区及び宮城総合支所まちづくり推進課、秋保総合支所総務課にて配布中です。

問い合わせ 仙台市市民局地域政策課

TEL 022-214-6129 FAX 022-214-6140

